記　録　誌

全日本仏教会　公開シンポジウム

仏教とSDGs ②

現代社会における仏教の平等性とは ～ LGBTQ の視点から考える～

2020年11月5日(木)開催

公益財団法人
全日本仏教会
WFB（世界仏教徒連盟）日本センター

公益財団法人　全日本仏教会　WEB公開シンポジウム

仏教SDGs

CONTENTS

ご挨拶 …… 2

提言①
仏教と多様性を考える～LGBTQの視点から～ 杉山文野 氏 …… 4

提言②
同性愛者の私がお坊さんになっていいの？ 西村宏堂 氏 …… 14

提言③
アライ（ALLY）としての僧侶の役割 川上全龍 氏 …… 20

トークセッション …… 24

レインボーステッカーのご案内 …… 36

ご挨拶

全日本仏教会第 34 期事務総長を務めております木全でございます。公開シンポジウムの開催にあたり、一言ご挨拶申しあげます。

本日はシンポジウムにご参加いただきましたこと、心から厚く御礼申しあげます。

本会は、持続可能な開発目標「ＳＤＧｓ」の具現化を進めております。本日のテーマは「ＬＧＢＴＱの視点から考える」といたしました。ＬＧＢＴＱの方々をはじめ多種多様なあり方を尊重し、すべての人が自分らしく生き、自身の幸せを願うことは、「一切の生きとし生けるものは、幸せであれ」という仏陀の教えとも通じ、仏教の教えの大切なことのひとつでもあります。

また「戒名」「法名」「葬儀」「お墓」「結婚」などの人生の節目といえる場面に仏教が関わってくる中で、現実的に性的マイノリティとされる当事者の方々に寄り添うこと、仏教界はどのように取り組んでいくべきか、どのように変わっていかなくてはならないか考えて参りたいと思います。

本日のシンポジウムが、仏教界のみならず、同宗連加盟教団をはじめとした他宗教の方々や社会の皆様にもご参加をいただき開催できますことは、誠に意義深いものと考えます。

ご視聴いただく皆様方にも、学びを深めていただける機会となれば幸いです。また、ご意見やご感想がありましたら、是非お寄せいただきたくお願いいたします。

最後に、本日のシンポジウム開催にあたりご登壇を賜ります提言者の皆様をはじめ、シンポジウムの開催にご尽力をいただきました諸団体の皆様のご協力に心より厚く御礼申しあげますとともに、ご参加いただきました皆様方のご健勝を念じ申しあげましてご挨拶といたします。

公益財団法人 全日本仏教会

第 34 期 事務総長　木全和博

公益財団法人　全日本仏教会　WEB公開シンポジウム

仏教SDGs

現代社会における仏教の平等性とは

―ＬＧＢＴＱの視点から考える―

提言①
仏教と多様性を考える
～LGBTQの視点から～

杉山文野氏

仏教とLGBTQって何が関係あるのかなと思われる方もいらっしゃるかもしれません。どうしてもLGBTの課題というと、パートナーシップだったり同性婚みたいなことに偏りがちなのかなと思いますが、とくにLGBTという課題があるわけではなくて、当事者にとっては24時間365日の生活の話であり、人生の話になるので、いわゆる生老病死ということであれば、全てに関わってくることかと思います。

今日の私の話が何か答えを出すような話ではないとは思うんですけれども、お話を共有することによって皆さんが考える何か一つのきっかけになればいいかなと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まずは簡単な自己紹介ですが杉山文野と言います。39歳です。東京都新宿区出身で、実家が歌舞伎町でとんかつ屋を営んでおりまして、もう70年近く商売をやっていますので生まれも育ちも新宿になります。早稲田大学を卒業してフェンシングの元女子日本代表でした。「お前そんなヒゲ面で出てきて何言ってんだ」とよく言われますけれども、生まれた時は杉山家の次女として生まれました。幼小中高と日本女子大学という女子校で、セーラー服を着てルーズソックスを履いて学校に通っていました。ただこの時期には既に自分のからだに対してすごく強い違和感がありました。でも幼心に「そういったことはひとには言っちゃけないことなんだろうな」と思って、誰にも言えずに幼少期を過ごしていました。

一番つらかった時期は、中学生から高校生にかけての時期です。いわゆる第二次性徴が始まって、体は順調に女の子として成長していく一方で、気持ちの上ではどんどんどんどん男性としての自我が強くなっていく。まさに引き裂かれるなんていう簡単な言葉では済まされないような心理状況でした。自分だけが頭がおかしいんじゃないか、こんなに頭がおかしいのはこの世に1人しかいないんじゃないかと根拠のない罪悪感で自分を責め続けるような毎日でした。今となれば「もっと早く言ってくれたらよかったじゃん」、「いや、そんなの全然気にしないよ、俺は平気だよ」と言ってくれます。その気持ちは嬉しいですが、なんで言えると思うのか。小さい時からテレビをつければ女性的な男性がオカマと言って笑い飛ばされていて、ちょっとでも男性同士のスキンシップあったりすると「なんだお前あれか、キモいなあ」、「おれに病気うつすなよ、おれはそっちじゃないからな」そんな会話が当たり前の様に笑い話になっている。特に僕が小さい時は、有名なテレビ番組で青髭塗ったタレントが、ホモと言っているキャラが非常に流行っている頃だったんですね。一セクシャルマイノリティの当事者からすると、家族で一緒にご飯を食べているようなときにそういった番組が流れてくると親が言うわけです。「もう、やあねぇ、こういう人」と。僕も本当のことを言ったら「やあねぇ」って言われちゃうんじゃないかと思いました。次の日学校に行けば周りの友達が前日の番組の話をして笑いあって「キモーい」とか言っている。もし本当のことを言ったら僕も「キモーい」と言われるんじゃないだろうか。いじめられたらどうしよう。居場所がなくなっちゃったらどうしよう。そう思うとやっぱり怖くて言うことはできなくて、むしろ僕も「キモーい」と言って笑い飛ばして、なんとか自分がばれないようにビクビクしながら過ごす学生生活でした。

この時に一番しんどいのはロールモデルがいないということです。いわゆる人生のお手本になるような方が目に見えないということです。子供の時って、身近なかっこいい大人に憧れて未来を描くものだと思います。例えばプロ野球選手になりたいとか。こういう人になりたいっていうのは、そういった大人が目に見えるから。でも社会で活躍する大人の中に、LGBTであることをオープンにされて生活されている大人というのは、ほとんど目に見えないので僕はこの時期に自分が女性として年を重ねていく未来がまったく想像ができませんでしたし、男性として暮らしていく社会や未来という選択肢があることも知らなかったので、僕は大人になれないのではないか。大人になる前に死んでしまうのではないか。どうせ死ぬなら早く死にたいな。そんなことばかりを考える学生生活でした。ではずっと根暗な毎日だったかというとそういうわけでもなく、女子校でボーイッシュな先輩っていうのはわりとモテたりもして、外に出れば明るく元気でボーイッシュな先輩を気取りながら、家に帰ると一人泣いている。そんな二重生活も長かったと思います。

そんな中で僕の転機は、カミングアウトしたのが大きかったです。中学の時に初めて彼女ができたのですが高校の途中で振られてしまって、それがつらすぎてカミングアウトをしました。なぜ僕に彼女ができたかというと、物心ついたときには自分から素直に湧き出る感情として、「あの子可愛いなぁ、好きだなぁ」と女の子を見た時に思う自分もいたんです。ですが、僕のこの頭も現代の日本社会で教育された頭です。そういったことはいけないことだ、気持ち悪いことだ、人に笑われてしまう、いじめられてしまう、そんな存在なのだと。決して誰かに、はっきりと教わるわけではないですが、ただ日々の生活のなかで少しずつ少しずつ刷り込まれてきたこの僕の頭が否定するんです。なので「かわいいな、好きだな」と思えば思うほど脳から指令が出ま

した。そういったことはいけないことだ、気持ち悪いことだ、お前がそんな気持ち悪い人であるはずがない、思っちゃいけない。この葛藤が本当に苦しかったのですが、たまたまクラスメイトの女の子に「別に女の子が好きなわけじゃないんだけど文野のことが好きになっちゃったんだよね」と言ってくれる子がいて、僕も気持ちを抑えきれずその子と付き合うことになりました。でももちろん誰にも言えないので、二人でひっそりと付き合っているつもりではありましたが、どうしても学校では一緒にいる時間が長くなってしまって、案の定あいつらレズのカップルなんじゃないかと後ろ指をさされるようになって、学校の先生にまで「なんかあんたたちいつも一緒にいて気持ち悪いわね」なんて言われました。すごく嫌な思いがある中でも、なんとか一緒にいれないかと頑張って付き合っていましたが、最終的には高校の途中で振られてしまいました。付き合うのも初めてなので、振られるのも初めてでした。ただでさえつらいことだと思いますけれども、それ以上に、唯一の自分の理解者がいなくなってしまうのではないか、こんな気持ち悪い僕を好きだと言ってくれると人は二度と現れないんじゃないかと思いました。またそれを誰にも相談できない。そういった不安とか孤独で、もう気がおかしくなるような状態で、ごはんも喉を通らない、夜も眠れない。そんな状況でも学校には行き続けました。なぜかというと、学校を休んでその原因を追及され、ばれるのが怖かったからです。とにかく学校には行かなきゃという思いで行っていたのですが、明らかに様子がおかしかったんでしょうね。周りの友達から「何かあった？大丈夫？」と聞かれては、「いや、なんでもない」と答えていました。「絶対に何かあったでしょ？」と聞かれても「なんでもない」と言い張っていましたが、最終的にはバスケ部のキャプテンをやっていた仲良しだった友達に、首根っこ掴まれてズルズルズルと放課後の部室まで連れていかれて、「ここまで来たら誰も来ないから言ってごらん。何かあったんでしょ？」と言われて、「実は・・・」と初めてのカミングアウトをしました。でも、泣きながらで、もう何を話したのか覚えていないです。泣きながら 18 年近く誰にも言えなかった思いを吐き出すように話しました。恐怖でしかなかったカミングアウトですが、ずっと黙って聞いてくれた友達が最後に一言、「話してくれてありがとうね。性別がどうであれ、文野は文野に変わりないじゃん。」と言ってくれました。僕はそこで初めて、この世に生まれ出たと言っても過言ではないような気持ちになりました。僕は僕だって言ってもいいんだ。僕は僕だって言っても友達だって言ってくれる人がいたんだ。決して僕は気持ち悪いだけの存在じゃなかったんだと。もちろんそこからすぐにすべてがうまくいったわけではないですが、それが大きな転機となって、少しずつみんなにカミングアウトするようになって、少しずつ自己肯定感を取り戻して今に至っていると思います。その当時の象徴的な写真なんですが、右から 2 番目が僕です。スカートを短くしてみたり、ルーズソックスを履いてみたり何とか皆に紛れようとしていた時期です。隣に写っているのが僕の初めての彼女です。この写真、実は振られた直後の写真です。かわいそうでしょ？付き合っていることは誰にも言えないので、別れたこともちろん誰にも言えない。振られた理由は、彼女に新しく好きな人が出来たからで、その好きな人というのは男性で、すぐに付き合うことになったんです。周りの友達は、「良かったじゃん、やっと彼氏できたんだ」、「今までずっといなかったのに良かったじゃん」と言いますが、そんな会話をしている横で 3 年近く付き合った僕が、「良かったね」と言いながら心で泣いていると。そんな状況ですね。

これはあくまでも、一当事者の一体験談ですけれども、もしかしたら皆さんのすぐお近くにも、もしかしたらお友達の中にも、もしかしたら職場の中にも、もしかしたらお客様の中にも、そしてもしかしたらご家族の中にもいらっしゃるかもしれない。「まさかうちの子に限って」と皆さんおっしゃるんですけれども、うちの親もそう思っていたと思います。まさかうちの子に限って。でもこれが現実かなと思います。当事者が最も言えない場所ツートップは「職場」と「家庭」です。なぜならば自分の居場所がなくなっては困る一番大切な場所だからです。その場所が大切ならば大切なほど言えないというのがまだまだ当事者の現実なんじゃないかと思います。

僕自身は、割と早い段階でカミングアウトできたということもあって、そこから少しずつ自分を取り戻していくんですが、ちょうど高校の終わりくらいに、このままでは最終学歴が女子大で、ちょっと生きていきづらいんじゃないかなと思うようになって、やっていたフェンシングの推薦で早稲田大学に入れてもらいました。大学に入ったら、今度は皆が就職活動を始めたんです。そこで、僕は履歴書の男と女どっちにマルをしたらいいんだろう、制服があるようなところでは働けないな、そんなことを考えていたら、やっぱり将来どうやって生きていっていいのか分からなくて悶々とした時期を過ごしていました。

そんな時に偶然の出会いがきっかけで本を出すことになりました。講談社から『ダブルハッピネス』という本で、いわゆる当時でいう性同一性障害のカミングアウト本というような形でした。この時の思いとしてはそういった人たちがどこか遠い存在の人ではなくて、もっとみんなの身近にいるんだよということを伝えたくて書いた本でしたが、当時はまだ LGBT という言葉もほとんど日本では使われていない時期でしたので、すごく珍しい人かの様に扱われるようになり、どこに行っても性同一性障害の人だと言われて、なんか窮屈だなと感じていました。

また、これとは全然違う活動で、グリーンバードというゴミ拾いのボランティア活動に参加していたのですが、取材を受ける機会があって、懸命に掃除の活動の話や環境問題の話をしたのですが、そこでできあがってきたのは「グリーンバードの杉山文野さんは性同一性障害を乗り越えて掃除をしています」という記事でした。ちょっと待てと。掃除と性別は関係ないだろうと。でも、その当時に僕が何かすると、とにかく性別のことばかり言われるようになって、なんか窮屈だなと思い逃げるように海外に行きました。バックパッカーとしてアジア、アフリカ、中南米とグルっと回りました。この時は、日本という国が多様な性に関しては不

寛容で、もしかしたら世界のどこかには、もっと暮らしやすい場所があるんじゃないかという淡い期待を持っていました。しかし、性別のことから逃げたいと思った海外で、今度は世界中で「She」なのか「He」なのか、「ミスター」なのか「ミス」なのか、「ムッシュ」なのか「マドモワゼル」なのか、「アミーゴ」なのか「アミーガ」なのかと問われ続け、最終的に南極船に乗ったんですが、その時ですら男性と部屋をシェアするのか、女性と部屋をシェアするのかと揉めまして、こんな世界の果てに来てまでもこの性別から逃げられない、いや性別だけではなくて、世界中どこに行っても自分自身から逃げられないんだなと思いました。そうならば移動して場所を変えるのではなく、今いる場所を生きやすく変えていく、そういったことが大事なんじゃないかと思ったのが今こういった活動をしている原点でもあります。

その後、一度日本に帰ってきて仕切り直してタイに行きました。タイに行って乳房切除という、おっぱいを切る手術を受けて、そこから男性ホルモンの注射を始めました。今でも月に 1 本程度の男性ホルモンの注射を打っていますので、その副作用として、ひげが生えたり、少し筋肉質になったり、声が太くなったりします。でももっぱら最近ネタにしているのは、だいぶ抜け毛が増えてきて、自分のお父さんと同じ頭皮クリニックに行っています。まさかこんな日が来るとは思わなかったです。その後に一般企業に就職しました。全国で 400 店舗くらいレストランを経営している会社の企画開発部に入って、本社と現場を行ったり来たりしながら 3 年間ほど過ごしました。30 歳の時に会社を辞めて昼間は LGBT の啓発活動、夜は飲食店の経営という二足のわらじをスタートいたしました。

そこからも紆余曲折ありましたが、一昨年の年末に子どもが産まれてパパになりました。「トランスジェンダーでパパってどういうこと？」とよく聞かれますが、真ん中に写っているのが僕のパートナーですね、もう 10 年くらい一緒にいます。その隣に写っているのが僕の友人でゴンちゃんといいます。ゴンちゃんはゲイで彼から精子提供を受ける形で彼女が体外受精で妊娠出産しました。体外受精でゲイの友達であれあれと、ちょっとなんか急に情報量が多いんじゃないかと。すごく珍しく使われてしまいがちなんですけれども、実際の生活は、そんなにどこのご家庭とも変わらないんじゃないかなと思います。子どもを保育園に送り迎えしたり、おむつ替えたり、そんな形で家族として生活して、僕たちの家にゴンちゃんも定期的に来るような形で、ファミリーとして日々を過ごしている。そんな状況です。

もはや、「LGBT」って何だろうということは、さらっとでいいかなと思います。レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーその 4 つの頭文字をとって LGBT。1980 年代後半ぐらいから欧米で使われるようになって、最近やっと日本でも使われるようになってきた言葉です。最近では「SOGI」という言葉も並行して使っています。Sexual Orientation and Gender Identity その頭文字を取って SOGI と言います。LGBT というとどうしてもマイノリティ（少数派）の方たち限定的な話し方になりますが、この SOGI という言い方をすると性的指向や性自認は、全ての人に関する課題です。最近ではセクハラとかパワハラと同じように SOGI ハラ、SOGI に関するハラスメントをどう無くしていくかと、そんなことも話題になっています。

Lesbian 女性として女性がスキ
Gay 男性として男性がスキ
Bisexual 同性・異性どちらもスキ
Transgender 出生時に割り当てられたジェンダー（性別）とは異なるジェンダーを自認する人々

SOGI = Sexual Orientation and Gender Identity
（ソジ）（性的指向）（性自認）

Transgender
トランスジェンダー

出生時に割り当てられたジェンダー（性別）
とは異なるジェンダーを 自認する人々

トランスジェンダーという言葉はまだまだ聞きなれないかなと思いますが、これは非常に幅の広い言葉です。トランスジェンダーの皆が手術をするというわけではなくて、手術をしなくてはという人もいれば、別に手術までしなくてもいいかなという人もいます。その中でも特に性別違和が強い場合に日本では性同一性障害と疾患名をつけるケースがありますが、世界的に見てみるとこれは障害でも何でもなく一つの生き方です。ただ、医療的なサポートは必要ですよねということで、WHO の精神疾患分類からも正式に外れまして、現在は性の健康というところに分類されるようになっています。遅かれ早かれ日本でもこの性同一性障害という言葉はなくなる予定ではありますが、日本では 2004 年から性同一性障害特例法というものがスタートしまして、５つの条

件をクリアすると戸籍上の性の変更ができるということになっています。現在までに 9,000 名くらいの方が戸籍上の姓の変更をされていますけれども、この条件が非常に厳しいと言われています。特に 4 と 5 です。これは何かと言うと、もし戸籍変更をしたかったら手術をして生殖機能を取り除けということが定められています。なんて野蛮な法律だと世界から非難を浴びています。僕自身は、乳房切除はしているんですけれども子宮と卵巣の摘出をしていないということもありまして、この条件にあてはまらなくて、見た目はこの様ですけれども、全ての書類上の表記は Female（女性）となっています。パッと家族写真をお見せすると、どこにでもあるような、すごく幸せそうな家族の写真の 1 枚に見えますけれども、僕と彼女は見た目は男女のカップルですけれども、法律上は女性同士になりますので婚姻の平等が認められてない日本においては、全く赤の他人のシングルマザーとその子どもと生活しているということになります。なので、例えばいざ彼女や子どもに何かあった時にも同意書一つサインができないということです。病院の面会すら断られてしまうかもしれない。そんな不安定な中で社会生活を送っているというのが現実になります。

そんな中で、LGBT のプライドパレードの運営をしています。このプライドパレードというのは、その名のとおり自分のセクシャリティに恥じることなく、誇りを持って生きていきましょうというもので、1970 年からアメリカでスタートして現在世界中で行われているムーブメントの一つになります。決して当事者の方だけが参加するわけではなくて、アライ（ALLY）の皆さん、フレンドリーな方たち、お友達だったり、ご家族だったり、皆さんに参加していただいて、年に 1 回ぐらいはみんなで集まって、ここにいますよということをしっかりと伝えないといつまでたってもいない人になってしまいますので、伝えていきましょうということでやっています。日本では 1994 年からこういった活動していますが、2012 年には 4,000 ～ 5,000 名だった参加者が、2019 年には 20 万人を超える方々にご来場いただけたということで、この数字の変化を見るだけでも日本の多様化を表しているのではないかと思います。これはオリンピックとも切っても切り離せないと言われております。性別および性的指向による差別の禁止ということが、オリンピック憲章の中にも定められていますので、開催国の日本としてはどういう扱いをしているのかということも世界から今注目をされているタイミングです。

性的指向に関する世界地図について、色でご覧いただければと思いますが、黄色っぽい地域は LGBT であることは何かしらの犯罪として扱われてしまいます。茶色の地域は死刑にまでなる可能性がある国です。一方で、この青の地域は、そういったことに法的保障がある国です。例えば G 7 においても同性パートナーに法的保障がないのは日本だけになりますので、日本はもう遅れているとしか言いようがないと思います。

世界では同性婚が可能な国は約 30 カ国ありますが、実はもう同性婚「Same Sex Marriage」という言い方はほとんどしていません。いわゆる同性婚ではなく婚姻の平等「Marriage Equality」と言います。すべての国民は法の下において、皆平等にと言っているのであれば、全てですよねということです。出来る人と出来ない人がいるっていうのはおかしいことです。構造的な差別をなくしていきましょうということで、昨年、日本でも初めて婚姻平等を求めて全国 13 組の同性カップル

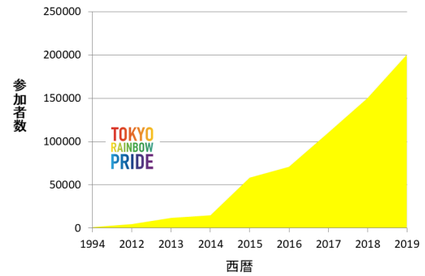
性同一性障害特例法（2004年～）

1、二十歳以上であること。
2、現に婚姻をしていないこと。
3、現に未成年の子がいないこと。
4、生殖腺がないこと又は生殖腺の機能を永続的に欠く状態にあること。
5、その身体について他の性別に係る身体の性器に係る部分に近似する外観を備えていること。

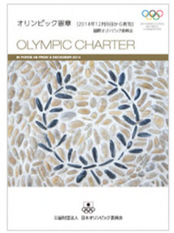
僕は戸籍上女性です

パレード参加者数

7年間で4500人が20万人！

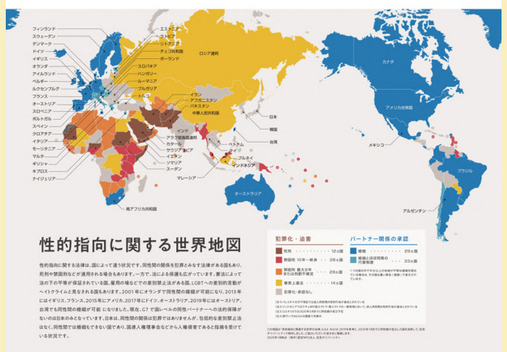


オリンピック憲章　第６章



《前文　オリンピズム根本原則》

このオリンピック憲章が定める権利および自由は人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治的またはその他の意見、国あるいは社会のルーツ、財産、出自やその他の身分などの理由による、いかなる種類の差別も受けることなく、確実に享受されなければならない。
（2015年版より）

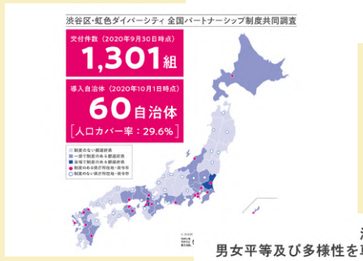


同性婚が可能な国

オランダ/ベルギー/スペイン/カナダ/南アフリカ/ノルウェー
スウェーデン/ポルトガル/アイスランド/アルゼンチン
デンマーク/ブラジル/フランス/ウルグアイ/ニュージーランド
英国/ルクセンブルク/米国/アイルランド/コロンビア/マルタ
フィンランド/ドイツ/オーストラリア/オーストリア/台湾
エクアドル / コスタリカ

約30カ国

が一斉訴訟を起こしたことは話題になりました。また同性婚ができないのは重大な人権侵害であると、日弁連が国に法制化を求めて意見書を提出したことも話題になりました。法律とは違いますが、自治体のパートナーシップということで言いますと、2020 年 10 月 1 日の時点で約 60 の自治体がこういったパートナーシップを進めており、全国的にひろがりを見せているという段階です。



最後に渋谷区の話をして終わりたいと思います。この自治体のパートナーシップの皮切りになったのが 2015 年に渋谷区と世田谷区で始まった同性パートナーシップ証明書の発行でした。なぜ渋谷区で？何でこのタイミングで？と聞かれるんですけれども、これは決して降って湧いたような話ではありません。遡ること約 15 年前の話になります。当時、僕は暇な学生だったので、たまたまお掃除のボランティアに参加しました。グリーンバードというゴミ拾いの活動ですが、それを始めたのが現在の渋谷区長、当時は渋谷区議の一期目だった長谷部健さんです。これがきっかけで長谷部さんにお会いしました。長谷部さんもそういったことにすごく理解があって、そういうことやろう、というタイプでもなんでもなくて、「へぇー。お前みたいなやついるんだな。」というのが最初でした。毎週のお掃除の活動で顔を合わせるようになって色々な話をしていく中で仲良くなって、「そうか、お前性別もおもしろいけど、歌舞伎町出身っていうのもおもしろいじゃないか。じゃあ歌舞伎町でもお掃除のチームやろうよ」なんていうことで始めました。ちょうどこの時期に僕の『ダブルハッピネス』という本が出ました。そうすると全国の当事者から会いたいですってメッセージ貰ったんですが、なかなか一人ずつお会いすることもメールを返すこともできなかったので、僕が当時やっていたブログに、僕はグリーンバードというお掃除のボランティアに参加していますので、ここに来てくれたら僕に会えますよと書いていたら、なんと全国の当事者がお掃除に集まっちゃいました。毎回のお掃除に全国の当事者の人が参加してくれるようになって、これを見た長谷部さんが「本当にいっぱいいるんだな。おれ気づかなかったよ。でもマイノリティっていうだけで困っている人がいるんだったら、渋谷区でなんかできないかな。」そんな話を始めたのは 10 年前のことです。何かできないかなという時に長谷部さんの方から、同性パートナーに証明書を出すというのはどうかと言ってきてくれたんです。長谷部さんはご結婚された時、「たかだか紙切れ一枚って思ったんだけど婚姻届け出した時にすごく幸福感があった。」と思われたそうです。この幸福感を共有するだけでも町の空気って変わって行くんじゃないかという、彼なりのアイデアで提案してくれて、できるところからやってみましょうということで、小さな勉強会を開いてみたり、色々な方にお会いしていく中で議会提案につながって、この日本初となるパートナーシップ証明書の発行につながりました。僕はこの一連の流れが、色々なことを象徴しているように感じていまして、何か自分がでかいことをやってやったぞという自慢話ではなくて、僕も決して世の中を変えてやると思って立ち上がったわけではなくて、普段の生活の中で出会ったもの同士が、友達が困っているなら出来ることをやってみようかと、そんな小さな一歩を踏み出し、その小さな一歩を積み重ねた、それが結果的には大きな流れにつながったのではないかなと思います。今日の機会もきっとそんな小さな一歩に、またそして大きな流れにつながる一歩なんじゃないかなと思っています。よろしくお願いいたします。

2015.11.5　日本初の同性パートナーへの証明書発行スタート！

杉 山 文 野

株式会社ニューキャンバス代表取締役
NPO法人東京レインボープライド共同代表理事

1981年東京都生まれ。フェンシング元女子日本代表。
トランスジェンダー 。
早稲田大学大学院教育学研究科修士課程終了。
２年間のバックパッカー生活で世界約50カ国＋南極を巡り、現地で様々な社会問題と向き合う。
日本最大のLGBTプライドパレードである特定非営利活動法人東京レインボープライド共同代表理事や、日本初となる渋谷区・同性パートナーシップ条例制定に関わり、渋谷区男女平等・多様性社会推進会議委員も務める。
現在は一児の父として子育てにも奮闘中。

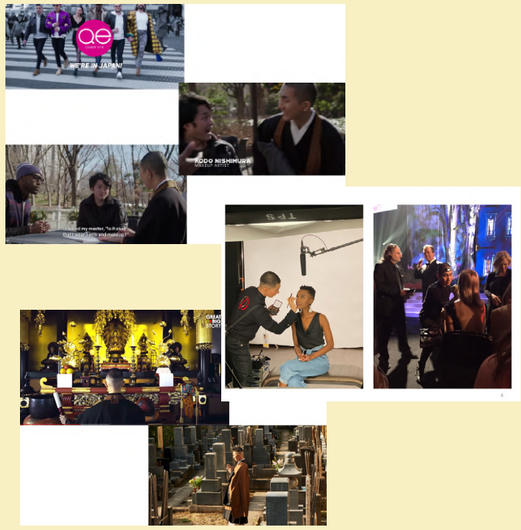
提言②

同性愛者の私がお坊さんになっていいの？

西村宏堂氏

こんにちは西村宏堂です。私はメイクアップアーティストと僧侶とLGBTQ活動家をしております。メイクアップアーティストとしてはミスユニバースの世界大会でメイクをしたり、LAで著名人のメイクをさせていただきました。最近はNetflixの番組『クィア・アイ』に出演し、ニューヨークの国連人口基金本部、イェール大学などで講演も行いました。

私はお寺で生まれ、僧侶としての活動もしています。私がどんな過程でメイクアップアーティストになり、お坊さんになったのかという話と、仏教がどのように世界の人々の希望になれるのかという話を今日はしたいなと思っています。



この写真の赤ずきんちゃんみたいな格好をしているのが私です。私は小さい時、母親に「こうちゃん女の子よ」と言っていました。家にある風呂敷を頭にかぶって長い髪に見立て、母のワンピースを着てドレスにして、ブブルちゃんという犬のぬいぐるみを抱っこしています。ディズニープリンセスが大好きだったので、家ではよく歌って踊っている子供でした。幼稚園に手作りのスカートがおもちゃとしていっぱいあったので、周りの女の子たちに、一つは腰にはいてドレスにして、もう一つは頭に巻くと長い髪になるよというような感じで、みんなにどうやったらもっとオシャレにできるのか、どうやったらプリンセスになれるのかということを教えてあげるのが大好きな子でした。セーラームーンも大好きで、アリエルも大好きでした。小さい頃に描いた絵を見てみてください。

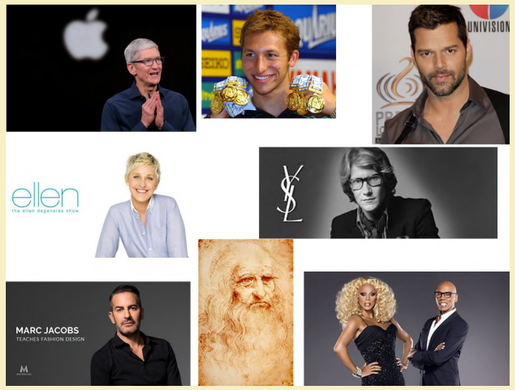
幼稚園の時は、自分が好きなことについて周りの人に話しても問題はなかったのですが、小学校、中学校に進むと、例えばピンクとかプリンセスとかそういった自分の好きなものを正直に周りの人に話したら気持ち悪いと思われるのではないかと考えはじめました。実際「西ちゃんて男の子の友達いるの？」と聞かれたこともありましたし、高校に入ってからは自分らしくいることがすごく難しくなってしまいました。ある時、高校で黒板の方を向いて荷物をカバンに入れて家に帰る準備をしていたら、後ろの方でクラスの男子生徒が「西村？あいつオカマでしょ」と話しているのを聞いてしまいました。私はそもそもあまり友達がいなくて、その子と話したこともなかったけれども、その時に「あー。何かわかるのかな。」と思って、胸が苦しくなりました。布団圧縮袋の空気が掃除機でヒューと抜かれたような気持ちでした。私はこれからあと２年もこの学校に通わなくてはいけないのに、どういう気持ちで過ごせばいいんだろうと、辛い気持ちになりました。私が好きなことを自由に話したら、もっともっと疎外されたり、もっともっと馬鹿にされてしまうのではないかなと思い、とても孤独で寂しい気持ちでした。私は自分は楽しい性格だと思うし、優しい人間だと思うのに、どうして自分のセクシャリティを笑われ、自分を隠さなければいけないんだろうと感じていました。

そんな時に、ある映画がきっかけでアメリカに興味を持ち始めました。日本では自分らしくいられない。でもアメリカに行ったら自分の思っていることとか、自分のセクシャリティ、あるがままの自分を受け入れてくれる人がいるんじゃないかと思い。最初はボストンに留学して２年制大学で一般教養を勉強しました。その後、美術を勉強したかったので、ニューヨークのパーソンズ大学という美大に入りました。この大学には世界中から色々な国の学生さんたちが集まっていて、数週間ごとに、自分たちの作った作品を皆の前で発表して、どの人の作品がいいとか、どの人の作品はちょっとイマイチだったかとか、色々と批評をする授業がありました。私はいつもどうやったら自分の作品が皆から注目されるだろう、どうしたら評価される作品ができるだろうと考えていました。

その頃、私は日本人としてあまり自信が持てずにいたのですが、2007年のミス・ユニバースの世界大会でミス・ジャパンが優勝したという話を聞いて、私は日本人でも世界で活躍できるんだということを知りま

した。当時、自分の目の形が好きじゃなかったし、背が低いという自分の容姿もコンプレックスに感じていました。そこでメイクを勉強したいなと思い、ミス・ユニバースでメイクをされていたメイクアップアーティストさんのアシスタントになりました。そこから殻が破れ、自分にメイクもするようになりました。日本にいたときは男性の自分がメイクに興味を持ってはいけないんだと思っていたので、いけないことをしているんじゃないかと、ドキドキしたりもしました。けれど小さい時からおしゃれが大好きだったし、プリンセスごっこも大好きだったので、自分にメイクすることは自分らしさを取り戻すような感覚がしました。また、他の人にメイクする方法も学びました。そして大学を卒業して、自分もメイクアップアーティストとして働き始めて、この後どうしようかなと考えていました。私はお寺に生まれましたが、小さい時は結構嫌だったんですね。何で私は周りの人にお坊さんになるのって期待されなきゃいけないんだろうとか、何で皆はお寺に来て「南無阿弥陀仏」とか言っているんだろうと。科学的にどのように極楽に連れていかれるんですか、みたいな考えを持っていたんですね。でも私にはお寺を継ぐ選択肢があり、私はお坊さんの仕事がどんなものなのかを知らないで、やりたくないですと言うのは少し違うかなと感じました。私の母はピアニストなんですが、もしモーツァルトの曲が嫌いだと言うのであればモーツァルトの曲をちゃんと自分で勉強して、その曲を知り弾けるようになってから初めて批判ができるんだよと言っていました。偏った知識だけで仏教のこと嫌だなと思っていたけれども、実際自分でお坊さんの勉強をしたわけでもないし、仏教の勉強をしていないので、私が何を言おうと、無知で意味のない文句になってしまうと思い、お坊さんの資格を取った上でどうなるかというのを知るためにお坊さんの修行に参加しました。私は小さい時から風呂敷を頭に巻いて長い髪に見立てていたくらいなので、髪を剃るのはすごく嫌だったんですけれども、剃ってみたら意外と似合っているかなと自分でも思いました。ファッションで活躍している周りのメイクアップアーティストさんにも「似合うね」と言っていただいたので、そういう人がいいって言ってくれるんだったらいいかなとも思いました。

修行はとても大変で、毎朝５時半ぐらいに起きて、１時間から２時間の法要を正座して１日に５、６回やるんですね。それで声が枯れてもまだ大きな声で念仏しろというので、だんだんガラガラ声になって、トイレに行って痰をペッとやったら血が混じっていたこともありました。修行中、私はずっと気になっていたことがありました。そもそも私は男性と女性の両方であると感じる、そして男性か、女性のどちらかではない。でも恋愛対象が男性だということはわかっている。そんな私がお坊さんになっていいのかなという疑問が湧きました。浴室は男性と女性で分けられていて、私は男性の修行僧とお風呂入らなければならない。浴室が分けられているのは異性からの誘惑を断つためではないのかなと思うけど、私は９０人近くの男の人と毎日お風呂に入っている。私のセクシュアリティのことは考慮されていないんだなと感じていましたが、誰にも知られたくなかったので静かにしていました。ある時、滋賀県からの修行僧が東京での修行に参加していて、お風呂場でパンツを履こうとしていた私の方に来て、「てめぇ最初見た時カマかと思ったぜ！」と大きな声で言うんです。私は「えぇぇ！その質問を今みんなが裸でいる時にする？」と思い固まりました。そして高校の時の黒板の前のことを思い出しました。高校の時の私は息が詰まって、聞こえなかったふりをして家に帰った。でも今、私は高校の時と同じ人間なんだろうかと自分に聞いてみたんです。ニューヨークにいた時、私は同性愛者であることに胸を張って生きている人など色々な人に出会いました。私の学部の学部長はゲイの人で公言していて、皆から信頼の厚い先生だった。アメリカにいる時には色々な人が LGBTQ の当事者で仲間がたくさんいるということを学びました。例えばアップルの CEO のティム・クックや、イアン・ソープ、歌手のリッキー・マーティン、エレン・デジェネレス、イヴ・サン＝ローラン、マーク・ジェイコブス。マーク・ジェイコブスは私の行ったパーソンズ美術大学の先輩です。あと、レオナルド・ダ・ヴィンチや、有名なドラッグクイーンのルポール。



彼らは世界中の人の生活をさらに良くしてくれていています。例えば多くの人は iPhone を使っているし、マーク・ジェイコブスとかイヴ・サン＝ローランに憧れている人もたくさんいる。だから私は、バカにされることもないんじゃないかな、私は人としての価値がセクシャリティで決まるわけではないんじゃないかなと思いました。私がすごく嬉しかったのは、ニューヨークでプライドパレードに行った時に、私の大好きなディズニーがフロートを出して「すべての家族を応援します」という旗を掲げて、レインボーのミッキーのロゴのシールをたくさん配っていたことです。それを見たときに、小さい頃から大好きだったアリエルとかジャスミン、ディズニープリンセスたちも、もしかしたらみんな私のことを応援してくれているのかもしれないと思ったんです。今まで差別されたこともあったけれども、差別していた人の家族の中には、ディズニーが好きな人も絶対にいるだろう、家族の中で『アナ雪』の歌を歌っていた子だって多分いるだろう、同性愛を反対する人の中にもアップル製品を使っている人はいるだろうと思ったんですね。だから一概に LGBTQ だからということで人をバカにしたり、蔑むことはできないと感じたんです。それで私は、私が今変わらなかったら日本は変わらない、昔の自分のためにも、バカにされることによって苦しんで自分らしくいられないという人のためにも「そうだよ」って言わなきゃと思いました。それでその修行僧に「そうだよ」って言ったら、その子すごくびっくりしちゃって、男性間での性

行為について聞いてきて、私はLGBTQに関係なく、それは人に聞くようなものじゃないだろうなと思って、モゴモゴしていたら私のことを前から知っていた友達が「西村君知ってる？西村くんはニューヨークに住んでいて、ミス・ユニバースのメイクをしているんだよ。」って話に入ってきてくれました。その「カマかと思ったぜ」と言った男の子は滋賀県から来ていて、東京に来ることがビッグイベントだったのに、ニューヨークから来ている人がいるって言うのでさらにびっくりしちゃって、とても目を大きくして静かになったんですね。私は、はぁー、やれやれ。めんどくさいなぁ、もうハラハラしたよ！と思いながら部屋に帰る時に、その男の子が私の横をパタパタと歩いて来て、「ニューヨークでもがんばれよ！」って言ったんです。えぇ！私をさっきまでカマかと思ったぜって言っていたのに応援してくれているの？とすごくびっくりしました。自分の価値は劣等ではない、そして自分はバカにされる立場ではないという気持ちを言葉に乗せて伝えられたことで、その子の気持ちが変わったんだなってすごく自分のことを誇りに思いました。それでも私はまだ自分がお坊さんになっていいのかなという疑問がありました。例えばお坊さんの戒の中には、お酒を飲んじゃいけませんよとか、装飾品をつけちゃいけませんよ、メイクをしちゃいけませんよ、香水をつけちゃいけませんよ、歌を聴いちゃいけませんよとか、踊りを観ちゃいけませんよとか、高いベッドに寝ちゃいけませんよなど、色々な戒があったんですね。私は、そんなにいっぱいあるんだ、でも私が小さい時から周りのお坊さんたちはみんな法事の後に小さい宴会みたいなことをやってビールを飲んでいたので、あれは何だったのかしらと思ったんですね。全部守らなきゃいけないわけでもないんだろうなと思いました。私はメイクをしたりハイヒールを履くことがあるので、そんな私がお坊さんになることで仏教の秩序が乱れたりとか、こんなに真面目じゃない戒を守らない人がいていいのかと思われたら嫌だなと思っていました。修行は全部で5回あるんですけれども、最後の回では、高名で皆から尊敬されているお坊さんがいらしていて、その方に聞こうと思って「同性愛者だけど大丈夫ですか」と伺いました。その先生が仰ったのは、「浄土宗では皆が平等に救われますよ、だから同性愛者であるということは全く問題ないですよ。」そして、「浄土宗で一番大切なことは皆が平等に救われること、そのメッセージを伝えることが大切なんです。今の浄土宗ではお坊さんで学校の先生をしたり、お医者さんをしている人もいる。そういう人は時計をつけたり白衣を着たりする。だからキラキラしているものをつけたとしても、何が違いましょうか。皆が平等に救われるという教えが伝えられるのであれば、私は問題無いと思います。」と言ってくださったんです。私は自分らしくいて、お坊さんになってもいいのかなと、大きなドアが開いて風が入ってきた様な、清々しく、爽やかな気持ちになりました。浄土三部経の一つである阿弥陀経の中には極楽の様子が描かれています。極楽には色々な蓮の花が咲いている。青い蓮の花は青く輝き、黄色い蓮の花は黄色く輝き、赤い蓮の花は赤く輝き、白い蓮の花は白く輝く。すなわち、それぞれの個性、それぞれの人が、それぞれの色で輝くことが美しいんだ。仏教は多様性を肯定しているという内容ですと、その先生が紹介し教えてくださったんです。私は小さい時から仏教のことを疑っていたけれども、仏教は実はもう2000年も前から私を応援してくれていたんだと感じました。

青色青光 黄色黄光
赤色赤光 白色白光

タイでの現状

私はこの仏教のメッセージを世界の人に紹介したいと思っています。仏教も色々な国で色々な形があると思います。例えばタイでは女性は男性の僧侶と一緒の立場ではなくて、法要の時は一段低い床に座ったり、本当のお坊さんとして認められていないことがあったりとか。また世界には宗教に基づく法律によって、同性愛を違法とする、または罪とする国が７０カ国以上もある。宗教的な歴史が、現状に影響を及ぼしていることもあると思います。私は他の宗教を否定したり、批判をするということは決してできません。しかし、全ての人がありのままの姿で生きることを肯定している仏教の教えを知ることで、少しでも自由な気持ちになってくれる人がいたら嬉しいです。私は日本で生きづらいと感じている人や、アメリカで自分らしく生きることが罪だと感じて苦しんでいる人に会ってきました。私は自分がお坊さんであるからこそ、自分らしく生きることに問題はないんだ、そして自分が好きな自分で生きることは幸せなことなんだと世界の人に伝えていきたいと思っています。ありがとうございました。

著書『正々堂々　私が好きな私で生きていいんだ』

西 村 宏 堂

浄土宗 僧侶
メイクアップアーティスト
ＬＧＢＴＱ活動家

1989年東京生まれ。ニューヨークのパーゾンズ美術大学(Parsons School of Design)に留学。卒業後ニューヨークでメイクアップアーティストのアシスタントとして経験を積み、独立。日本語、英語、スペイン語を操り、ミス・ユニバース世界大会やニューヨークファッションウィーク、ハリウッドの著名人のメイクを手がけるなど、世界的に高い評価を得る。2015年に浄土宗の僧侶となる。LGBTQ(性的マイノリティー)である自らの体験を踏まえ、啓発活動も行う。メイクアップアーティストであり、僧侶であり、LGBTQでもある独自の視点で「性別も人種も関係なく皆平等」というメッセージを発信。ニューヨーク国連本部UNFPA(国連人口基金)、イェール大学、スタンフォード大学、増上寺などで講演したほか、LGBTQフレンドリーメイクセミナーの開催や、仏教の平等思想を示すレインボーステッカーを全日本仏教会と共に作成するなど、活動は多岐にわたる。NHK、米CNN、英 BBC をはじめとする国内外のメディアに取り上げられ、Netflix番組「Queer Eye」にも出演。2021年にはTIME誌「NEXT GENERATION LEADERS」に選出された。著書に『正々堂々 私が好きな私で生きていいんだ』があり、2022年には英語、独語、仏語で著書 "This Monk Wears Heels" を出版。

提言③

アライ（ALLY）としての僧侶の役割

川上全龍氏

川上全龍と申します。よろしくお願い致します。臨済宗妙心寺派、京都の妙心寺本山の塔頭の春光院というお寺の副住職をさせていただいております。

現在、ギャロップさんの主観的ウェルビーイングのデータを取るなどの質問事項を考えるグループに入っていまして、今世界で言われている幸福度って何なのだろうか、このLGBTQのことも関わってきますが、皆が幸せに生きる状況や条件ってどういうものだろうか、それは各国一緒なのだろうかということをやっております。特に日本や台湾、韓国が先進国の中でもだいたい50位ぐらいですが、質問事項がかなり欧米寄りの質問ではないのか、その幸福の考え方が欧米寄りの考え、西洋哲学ベースの考え方ではないのかなというところも考えていまして、仏教的、東洋哲学的、あるいはアジア的な幸福度とはどういうものなんだろうかということ、また中東地域などの世界的な他の地域での幸福度ってどういうものなのかということを盛り込むことをやらせていただいています。

私もお寺で生まれ、曽祖父の叔父の代からこのお寺を任されております。曽祖父が川上狐山といいまして、印可証明という老師と呼ばれるタイトルを持っていた方で、『妙心寺史』とか『大蔵経索引』を作った人間です。大蔵経の索引を作っただけではないかと思われる方もいらっしゃいますが、シルクロードなどで出てくる仏教的な経典や考古学的な研究など、今でもコンピューターでデータベース化、デジタル化されていますけど、そういうもので使う索引を作りました。

曽祖父がそういう人間だと、私の祖父や父もかなり苦労したと思いますが、やはり私も西村さんと同じような感じで、お寺で育っていると将来お坊さんになるんでしょと言われます。それにすごく不満を感じました。特に妙心寺の本山という場所なので、まわりに46のお寺があり、言ってみれば町内会の人がみんなお坊さんやお寺の人という感じです。そういう環境にいると、やっぱり顔を会わせる人から将来お前もここの住職になるのかという感じで言われるわけです。やはり子供としては、それは非常に面白くないことで、何でこの人たちに将来を決められているのだろうというところなんです。

高校時代、陸上部だったのでワシントン州と兵庫県と京都府の交歓試合に参加させていただきました。私は高校でいじめられてはいないですが、どちらかと言うと周りから変だって言われることがすごく多くありました。小さい時にダリのドキュメンタリーを見た影響で変わっていることって別にいいことなんだという感覚でいた人間なので、あまり日本の学校に馴染めずにつらい時期もありました。そんな時期に高校の交歓試合でアメリカに行った際に、僕はずっと中学校から高校まで英語の成績が3だったので、言葉は全然通じませんでしたが、ただなんとなく感覚で「あっ、ここいいかも」みたいに思ったんですよね。高校2年の夏でしたが、帰ってきてすぐに高校の先生に「もう大学受験やめます、日本の大学には行きません。」と言って、留学の準備をするという話になりました。その時に大反対されて「おまえ英語の成績わかってんの？」と言われて、今もその先生は副校長をしているんですけど、たまに講演行くと「あなた言ったこと間違っていましたよね」みたいなことを冗談で言っています。

とりあえず語学学校から行こうと、テキサス州のライス大学の語学大学に行きました。当時のアジア人のイメージは、例えばカラテキッドの世界、グーニーズの世界などで、アジア人の男性のキャラクターというとガリ勉、スポーツできない系という感じが多かったのですが、私は陸上でも投擲をやっていて体がごつかったので、私がジムに行くとアジア人でこれだけウエイトできるやつ珍しいよねと、色々な教授と友達になったりして色々なことを学んで、社会心理学に興味を持ちました。そこでアリゾナ州立大学に移りました。

私はアメリカに行った時はどちらかというと保守的な人間でした。行った州も保守的なところで、レッド・ステイツですよね。テキサス州は当時ジョージ・ブッシュのジュニアが知事をやっていた時期で、そうとう自分も保守的な人間でした。それこそ杉山さんの話で出てきた様に、日本のテレビをつければ青髭を塗ったタレントがホモといっている世界だし、僕は男子校に行っていて、やっぱり冗談でも男子同士仲良かったりすると「お前ホモだろ」みたいな世界だったわけですよね。同性愛というものに対してすごく偏見を持っていた自分であって、そんな中でアメリカに行きました。私が行った時期だと、さっき西村さんのお話に出てきたエレン・デジェレネス、彼女が番組でカミングアウトして、それでキャンセルになっている時代です。アメリカ自体もLGBTQに関してまだ葛藤しているような時代で、かなり偏見が残っている時代でもあったし、特にテキサスがLGBTQの人があまり周りにカミングアウトできないような状態という場所で、ヒューストンは結構リベラルな場所でもあるんですけど、それでもなかなかカミングアウトできるような場所でもないというような状況でした。バーに行った時だと思うんですけど、なよっとした男性が入って来た時に、私が差別的なことをぽっと言ったんですよね。その時に隣にいる友達が、「何言っているの。僕もそのうちの一人だよ。お前もアジア人だからって差別されることってすごく苦しまないか。」と言われました。テキサス州は一歩大都市の外に出ると、本当に映画で見るような、日本人だろうが関係なくアジア人に対して、なんで肌に色がついているお前がここにいるんだというような人種差別があることもあります。日本の中で自分たちは昔のアパルトヘイトの時代にhonored whiteと言って、名誉白人みたいな感覚でいる人がいると思うんですけど、特に僕の世代だと、まだ日本は経済的に影響があったり、日本製品が良かった時代で、日本人だけ特別であると思っている人たちがいっぱいいました。でも大都市のヒューストンから一歩出ると、差別を受けました。ガソリンスタンドで車にガソリンを入れようとした時に、さっさと出ていけってガソリンスタンドのオーナーに言われたようなところもありました。そういう差別を受けていて、でも自分もそのLGBTQの人に対する差別をしているというこ

とに気がつきました。友達に、「僕は僕じゃない？僕のことをわかっているよね？ただ僕がゲイだということで僕を差別するのか？」と言われました。それで、自分はどんな偏見持っていたのだろうかということを目の当たりにして、そのあたりから自分も差別される場所にいるし、自分も差別される立場でもあるし、だんだん理解が進みました。

私は国際結婚していて妻がアメリカ人です。私の妻は、京都の大学で日本語で日本美術史を教えている教授でもありますが、いまだにごはんに行くと、ウェイトレス、ウェイターの人が僕の方ばかり見て日本語でずっと話します。僕のいない時に妻がレストランに行った際に、10年くらい日本住んでいますが最後に Welcome to Kyoto と書いてあるケーキを貰ったと言っていました。やっぱり妻も見た目だけで外国人として判断されます。結婚してすぐに妻と一緒にアリゾナに行きました。老後に余生を過ごすような場所として、引退した方が色々なところから集まっているスコッツデールという保守的な場所があります。妻はシアトル出身で、人種差別とかそういうものを全然経験したことがなかったので、アリゾナでショッピングモールに行った時に、何でみんなジロジロ私たちのことを見ているのって聞いてきたんです。それはもちろん、君は白人で俺はアジア人だからだよ。ここはそういう場所だからねと言いました。去年の夏に妻が学会で、私がイートン校で授業を頼まれて、二人で都合を合わせて子供を連れて一緒にスコットランドに行った時に、エディンバラに行ったんですが、やっぱり同じようにギョロギョロと私の顔を見て、妻の顔を見て、子供の顔を見るという感じなんです。日本でも妻は差別されるし、私と一緒にいると差別される場所もあり、僕はこの言葉が嫌いですがうちの子が「ハーフ」です。ハーフだから友達になりなさいよあなたとかそういう人っていまだにいるんですよね。やっぱり異人種間での国際結婚ではいまだにこういうことになっているなと思います。

本題の方ですが、私も同性婚とか異性婚という区別をしないです。最初から Marriage Equality。ただ「マリッジ」という言葉がキリスト教などの場合、宗教的な言葉になっているので、パートナーシップなど、言葉には気を付けなくてはいけません。2010年に女性同士のカップルからのリクエストがあって始めるんですけど、その二人のうち一人はお寺にしょっちゅう来ていた仲が良い方で、実は結婚式をここで挙げたいと相談されました。それは素晴らしいことだって言いましたら、女性同士だけど問題はないかって言われて、たぶん問題はないよと答えました。一応その時に仏教の経典とかを見て、在家の方に対してそういうところは制約があまりなかった。特に上座部仏教の方はやっぱり修行者に対して結構そういう細かい決まりとかがいっぱいあるんですけど、大乗仏教の場合はそういうのがあまりなかった。私自体も知っている人だし、偏見などもだんだん理解が進んでいた人間になってきたので是非ここでやってみましょうということで結婚式を挙げました。あまり公開したくないということだったのでその２人の写真はありません。リクエストがあれば挙式を行っていたのですが、ホテルグランヴィアさんと組んだ LGBTQ の結婚式をホテルでやりたいと相談がありました。ホテルにあるのが神道式の場所で、できないので京都で探していたら川上さんの名前が出てきたと言われて、じゃあ一緒にやりましょうかということになりました。それが新聞の記事になったんですね。そうしたら電話がガンガンかかってきて、大体は反対派の人、神道ではみたいな内容で、なんで海外の問題を日本に持ってくるんだというような言い方する人がいたり、神代の時代から結婚式というのは男性と女性で決まっているんだよという言い方をする人もいました。あとは、大分の妙心寺派寺院の檀家だと言う人から、あなたみたいな人がいるから妙心寺派の名声が落ちるみたいなこと言われまして、関係ないだろうと思いましたが、仏教経典を端から端まで読んだことあるんですかと聞きました。そうしたら、お坊さんの法話を聞いたことはあるし、般若心経を読んだこともある。それ以外ないよと言われました。それだったら読んでから言ってくれと。もう一つ言ってみれば、たしかに五戒の中で不邪淫戒というのはあるのだけど、不邪淫戒というのは、両方が認めていない性交とか体を触ったりとかすることがダメなだけであって、愛し合っていて同意がある二人ならばいいんじゃないのと。だからそこで突っかかってくるのはおかしいことで、そういう決まりなどが分からない人間が何でそういうふうにちょっとした知識をかじって反対だ賛成だと言うんですかと。先ほど皆さんも言っている様に、元々こういうことはその人の生き方にかかわること。生き方をこうだ、ああだ、これが正しいんだ、これが絶対なんだっていうのはあまり仏教的じゃないんですよね。色々な場所とか時代とかに合わせてどんどん変化を遂げてきて、やっぱりその人というもの、言ってみれば私が今やっているウェルビーイングの世界だと、どう良く生きるのか、どう良い状態を保てるのかという話なので、そこのところで同性愛だから異性愛だからという区別をするのではなくて、どう人間として生きるのだろうかということを私は結婚式の中で中心にやっています。

非常に本山なども理解が進んで、認めてくれているのかなと思ってこの場所でやらせていただいているんです。やはり最初は色々と反対の意見もあると思っていたんですけど、こういう時に一番重要になってくるのは知識で、端から端まで色々な経典読み漁ったっていうのもあって、こう攻撃されたらコレとコレ出してきてというように、ちょっと弁護士的な感じのことになるんですけど、そういうことをやって皆さんが安心して結婚式を挙げられるような場所をつくる。やっぱり仏教というと法事とかお葬式とか死んでからというイメージがあるんですけど、仏式結婚というのは昔から日本でありましたし、杉山さんが言ったように生きるということを前提にして、言ってみれば死ぬも生きるも同じものですから、同じこの人としての人生の一部であるわけで、ここでみんなで新しい一歩を踏み出す。私がやったことは宗教的な結婚式なので法的なところは何もないんですけど、思いは大切だと思うんですよね。確かに法律的なところも絶対重要なポイントですが、日本の法律の場合、宗教家がそれをできないので、この瞬間、結婚式を挙げる瞬間をその二人にとって、一番思い出深い瞬間にしたいなと思って努めております。

川 上 全 龍

臨済宗妙心寺派　春光院副住職

米・アリゾナ州立大学で宗教学を学んだ後、宮城県の瑞巌寺にて修行。
2007年より春光院の副住職として、国内外の企業、大学、学会やイベント（イートン校、MIT、ブラウン大学、HBS, INSEAD, Mind & Life InstituteのISCS 2016とIRI 2018、TEDx、マイクロソフト社など）などで禅やマインドフルネスの講演、ワークショップ、リトリート等を行う。
2008年からは米日財団の日米リーダーシッププログラムのフェローとしても活躍。
著書『世界中のトップエリートが集う禅の教室』（角川書店）

戸松

戸松でございます。お三方のお話を伺いながら色々と考えたり、そうだなそれは気が付かなかったなとか思っておりました。

なぜ全日本仏教会でこのようなシンポジウムを開催したのかということについては、先ほど事務総長からも話しましたようにＳＤＧｓの具現化ということで、これは非常に大きな枠組みでして、西村さんのお話からも、それから杉山さんからも、川上さんからもありました。根本的に仏教の経典や元々の教えは、色々な人のあり方にあまり関わらず、こだわらず、もっと言うと当時の社会的な規範ですとか社会的な地位、インドではカースト制度のもとになる様な制度がありましたが、そういう事にかかわらず誰もが悟りを開ける、誰にもそういう救いの道がひらかれているということで、おそらくこれが宗派にかかわらず私たちが共有できることです。しかし実際の自分たちのあり方、あるいは実際に私たちがやっていることを考えると、いわゆる戒名というものがあり、戒名では亡くなった後も男性女性がわかる様な形になっているものが多いです。私たちはその方のことが分かるような、いいお戒名と思いながらつけていても、本当はその方がカミングアウトできずに実は違う思いでいたということもあるかも知れません。具体的な数値はなかなかわかりませんけど、そういう思いを持っている方たちがいらっしゃる。

仏教界のあり方も、「第１回仏教と SDGs」シンポジウムでテーマにいたしました「女性の視点から」という点では、本来は平等なはずなのに実際には、社会通年からするとお坊さんというとまず男性がイメージされ、各宗派の意思決定に関わるような役職者や私ども全日本教会もほとんどが男性です。教えは平等と説いているのに私たちのあり方はどうなのだろう。そこをまず私たちがしっかり形にして、変わっていこうとしなければ本当に色々な方の思いを受け止めることができないのではないかと全日本仏教会では感じており、本日は LGBTQ 当事者の皆様をはじめ、それぞれのお立場からの経験やライフヒストリーをお伺いいたしました。

その中でそれぞれに挫折をしたり、色々な思いがあると思います。この中で私が感じていましたのは、杉山さんがお話の中で「生老病死」という言葉を使われて、それぞれのステージでの色々な経験を説明されたこと。そして杉山さんも西村さんもカミングアウトが大きな転機になったということ。これは、自分自身をそのままありのままで受け入れるということで、やはり自分のことが受け入れられなければ、非常に苦しく辛いということかなと思いました。川上さんはアメリカでの個人的な体験であったり、奥様が日本人でないということで具体的に色々なことを感じていらっしゃると思います。

西村さんのお立場から、実際にこのようなカミングアウトができる場所というところで、お寺から人々に門戸を開いたり働きかけをしたらどうだろうとか。あるいは杉山さんのお立場から、例えばお寺は敷居が高いとか、例えばプライド・パレードなどを一緒に協力してやってはどうだろうとか。仏教に対して、こういうことを何か一緒に出来るんじゃないかということがあれば、感じられていることをお一人ずつお話をしていただければと思います。

杉山

ありがとうございます。僕自身もそうなんですけど、あまり宗教とかって恥ずかしながらちゃんと考えたり向き合ったりしたことがなかったんですね。勝手な食わず嫌いみたいなもので、LGBT とかトランスジェンダーの当事者である自分というのは宗教的に受け入れてもらえないんじゃないかという漠然とした不安があったように感じています。今も自分の中にもそういった偏見みたいなものがあったと思うんです。でもそういった中で是非やっていただきたいのが、僕はよく言っている、カミングアウトではなくて「ウェルカミングアウト」という言い方をするんですが、当事者が実は僕こうなんですというカミングアウトではなくて、周りの方がウェルカムなんですよというカミングアウトウェルカムですよという事を言っていただけると当事者としては非常にありがたいというか、カミングアウトしやすくなるんじゃないかなと思うんですね。

やはりこの LGBT をはじめ、セクシャルマイノリティの課題を考えるときの一つのキーワードが、目に見えない。やはり非常に見えづらいということはあると思うんです。例えば僕も元女子ですと言わない限りはなかなか分からないと思いますし、じゃあ今お隣にいらっしゃる方がどうなのか、お寺とかにいらっしゃった方々はどうなのかというのは見て分からないですけども、同じようにアライ（ALLY）の方も目に見えないんですね。フレンドリーですよ、ウェルカムなんですよっていうのは目に見えないので、是非ここにいますよという事を言っていただきたい。川上さんのようにわかりやすく同性同士の結婚式をうちでは挙げられるんですよ、ということをおっしゃっていただけるのは、「あっ、ここにいたんだ」っていうように、すごく当事者としてはわかりやすいです。カミングアウトができるということ、自分が自分でいてもいいんだというのは、結局安心感につながると思うんです。

最近は心理的安全性という言葉を聞く機会も増えたかなと思います。これは元々 Google さんで、職場において心理的安全性が保たれている環境だと、その個人としてもチームとしてもパフォーマンスが発揮しやすいというデータが出たということなんですが、カミングアウトというのは対個人としても対社会としても、そこを伝えても、それが安全なんだという安心感さえあれば言うことができると思うんですが、そこに不安があるかぎりは言えないんですね。そうすると不安の中で暮らしているということで、やっぱり自分自身を発揮できていないということにも直結するんじゃないかなと思います。是非誰でも安心安全なんだよと、そういった安心の場所はここにありますよということを積極的にウェルカミングアウトしていただけると、色々なところでご一緒させていただけるんじゃないかなと思いました。

戸松

ありがとうございます。今お話をお伺いしていて思ったのは、目に見えない事を、お寺からどう伝えることができるのかということです。正直にざっくばらんに、お寺とかお坊さんというと、どういうイメージがありますか。

杉山

何かやっぱりとっつきづらいというか、あまり自分にご縁がないというか、そういうイメージがありました。ただ僕は個人的には、特にこの数年でお坊さんのお友達が増えてきたというのがあって、ちょっと見方も変わったんですけど、ぶっちゃけそういうイメージがありましたね。

戸松

私たちお寺側も、お檀家とか知っている方とは交流があるけど、そうでない方達にはあまり発信もしてこなかったです。例えばステッカーか何か。レインボーステッカーを門に貼っておくとか、そうするとそれを見てちょっと相談をしにいけるかなとか・・・

杉山

それは凄く大きいと思います。例えば今日みたいなこういったイベントを開いていただくだけでも、「あっ、それありなんだ」って思った人はいっぱいいると思うんですよ。だからこういうトークをすることもそうですし、わかりやすくこのレインボーのシールを貼っていただくとか、ホームページなどにもそういうことを一文入れていただくとか、そういったことでだいぶイメージっていうのは変わってくるんじゃないかなと思います。

戸松

ありがとうございます。西村さんどうですか。当事者で、尚且つ僧侶として。まさにご自身が自分のありのままでいいということを先生から言われて、それがすごく自信になったということ。それから自分の外見に自信がなかったけれど、メイクアップアーティストとして、メイクをすることによって前を向いて生きていけること。ご自身が僧侶としてやることが同じというか、そういうことで自信を持たれたということだと思いますが、何かご自身が考えていたり、あるいはこういうはたらきかけができるんじゃないかということはありますか。

西村

私が思ったことは先ほど文野さんがおっしゃっていたようにリーダーがあまりいないということが問題になるかなと思っています。何か大きなムーブメントを起こす際には、マーティン・ルーサー・キングだったり、ローザ・パークスだったり、自分が逆境に立たされていても力強く、たじろがずに歩いていけるという人がいたと思います。現に文野さんもリーダーとして活躍されています。私も仏教を勉強して、自分でメイクをしたり、人に平等を伝えながら活動していくというところを見ていただいて、LGBTQ の人と聞いたときに、文野さんみたいな人もいるし、宏堂さんみたいな人もいるんだ、だからテレビでやっていたような気持ち悪いという印象ではなくて、こういうふうに頑張っている人もいるんだということが皆さんに伝わるといいなと思っています。

私が先ほど川上さんのお話で「あっ！」と思ったのは、知識を持っていない人が分かったふりをして、強い発言をするということがとても大きな問題だということです。例えば足立区で同性愛者の人が増えたら足立区は滅びるというような発言がありましたが、それは本当に無知なことによる発言だと思うので、そのように知らないのに強く言う人が減っていってほしいです。知っている、勉強している私たちだからこそ「仏教では応援していますよ」ということをはっきり伝えていくことが多くの人に影響を与えていけるかなと思います。

戸松

ありがとうございます。それでは「あっ！」と言われた川上さん、ご自身が取り組みをされていて、いかがでしょうか。川上さんはやっぱり平均的なお坊さんとご自身が違うと思いますか。

川上

いわゆる昔から言う「平家、海軍、国際派」の一部で、メジャーにはなれない人ですよね。海外組で処理

されることもあります。

記事などが出るときにいつも「保守的なお寺さんが」とか言われますが、「いや、そんなことないよ」と思っています。仏教って最初から既存のものを否定するところから始まっているんだから、当たり前だと思っていることに対して疑問を持てよと。我々の宗派の開山の言葉に『看脚下』という言葉があって、足元を見なさいということですが、悪い意味じゃなくて、元をちゃんと確かめなさいよという意味です。当たり前だと思っていることではなくて、今どういうことが起きているんだということをちゃんと確かめなさいということです。仏教というのは、いま当たり前だと思っていることに対して、「いやそうじゃないんじゃないの。もうちょっと考えてみようよ」というふうに進めていくというところがあると思うので、ある意味、仏教ってすごく反体制的なところがあり、かなりリベラルだと思うんですよね。

杉山さんの話の「アライ（ALLY）」というものと、「ウェルカミングアウト」という話がすごく大切だと思っています。最近、妊婦さんのマタニティキーホルダーが全然役に立たないよねという話の中で、逆に付けていることで席を譲る意志があることを示す、席譲りますマークのキーホルダーを出した動きがあったじゃないですか。アライについても、ああいう感じのものを絶対に作るべきだと思うんですよね。我々も絡子という略袈裟を掛けますが、そのようなものにつけるピンバッジみたいなものとか、それこそお寺の門に貼るというのもそうです。うちのウェブサイトの結婚式のページに関しては、性的指向とか宗教に関係なく皆さん平等にここで式を挙げられますよ、そういうお手伝いをしますよということが書いてあります。

まだまだこういう社会であり、多分お寺社会だと周りを見て他のお寺がやってないのにうちだけみたいなことは我々非常に強く感じるところだと思うので、みんなやりたがらない社会でもあります。でもそうじゃなくて、透明性というところで自分は理解者であるということをオープンにしていく。おっしゃったようにカミングアウトする側というのは相当な勇気がいるわけです。だから「本当に大丈夫なんですよ。自分はこうなんだからここは安全地帯ですからね。」みたいな感じでオープンにしていくことは重要だし、それを可視化する妊婦さんに席譲りますマークのキーホルダーみたいな感じの何かを我々が作っていくこともできるんじゃないかなと思います。いかがですかね。

戸松

ありがとうございました。まさに安心して話せる場所って、お寺というのはある意味そういう役割を担っていると思うんですね。色々な点でそうなんですけど、こういう問題は多分昔からあったと私は思っています。仏教界でもそうだし、江戸時代でもそうだし。人がいる以上、人が人を好きになるのに、それがたまたま男性だったり女性だったりするだけなんですから。だけど今まではこういうものがあまり公に語られて来なかった土壌があるんだろうな思います。

川上

おそらく明治ぐらいからだと思うんですよね。それ以前は、文学とか見ていると結構オープンなところもあるわけで、逆に言うと階級の違いとかのほうがかなりタブー視されていたと思います。ただ明治になって、当時の保守的プロテスタントの考えの西洋のいわゆる文明国というものに、無理矢理に日本が当てはまろうとしたわけです。

戸松

なるほど。じゃあ私たち仏教は原点に戻ればいいということですかね。だとするとこれは各宗派でもそんなに難しいことでもないですし、私たちができることをしていきましょう。

先ほど、はっと思ったのは杉山さんが話された、人の思いとか辛さ、指向性って目に見えないということです。これって実は、いま高齢化社会の中でお寺に大勢いらっしゃる方たちも同じです。例えば障害が目に見えてある方だとすぐにお声かけしやすいですが、見た感じは普通だけど耳があまり聞こえないとか、あるいは足が痛くてあまり歩けない、階段が実は登れないという方もいらっしゃる。そういう方たちにもこういう機会を通して、やっぱりお寺は思いを寄せて心を開く、施設面だけではなくて門を開くということですね。今日感じたのは、まさにカミングアウトのウェルカミングアウトもそうですが、ウェルカミングってことは、立場を越えて多くの方に対してお寺があるべき姿だと感じました。

ただこれまでお話しいただきましたが、いつもいいお話でしたということで終わってしまいます。それではダメなので、今回は仏教界として具体的なアクションに繋げていきたい。そうすることによって、当事者の方たちのためになるとともに、大事なことは私たち自身が学べて、経験ができるということです。それによっておそらくそれぞれのご宗派の信仰が深まったり、僧侶としてのあり方も変わっていけるのかなと思って伺っていました。

例えばきっかけとして具体的に生老病死の点で関係が出てくるのは川上さんがやられている結婚式。もうちょっと前からいくと、お寺や他の宗教団体は幼稚園や保育園などの幼児教育にずっと関わってきました。そういうところでも小さい時から西村さんみたいな思いでいらっしゃる方はいると思います。私も思い起こせば小学校でも中学でも高校でもクラスに必ず一人は、何かそういう雰囲気の人がいました。そういう点では、保育だとか幼稚園のところや仏教系の学校でそういう情報を是非お話して、管理したり教える先生方にご理解をいただいて保護者の方にもご理解をいただく、そういうことが大事かなと思っております。

現在、私たちの中心的な役割は、何をおいてもやっぱりお亡くなりになった方のご供養をすること。そしてその後の法要をしていくということが中心的であります。ただ先ほど言いましたように、亡くなった方の生前の思いをはたしてどのぐらい私たちがお伺いしていて、亡くなった時にもそれに対してしっかりご供養できるかというところにおいて、今はなかなか普段の関係性がカミングアウトできるまではありません。そういうことを紡いでいくための何かということで、先ほどステッカーと言いました。いま終活ということが

言われています。人生の最期をどうやって幕引きするかと。そうするとその中には、お葬式もあるでしょう、お墓のこともあるでしょう、それからお寺の檀家であれば戒名のことがあるでしょう。それ以前に、先ほど杉山さんが言われた具合が悪くなって入院した時にどうするかというような医療の問題もあります。あるいは愛する人に自分の遺産を残して、後は安定した生活をしてもらいたいと思ったときに、現状のパートナーシップだけではなかなか難しい。

また、私も同性婚っていうのが非常に何か違和感があったんですけど、先ほど杉山さんと川上さんからマリッジイコーリティ（Marriage Equality）とお伺いしました。英語だとすごく分かりやすくて、日本語だと婚姻の平等性となります。仏教でも、たぶん同性婚とか異性婚という言い方は教えにあまりなじまないのかなと。そういう意味では、婚姻は婚姻で、人と人との婚姻で一番大事なことは、お互いに尊敬し合って信頼し合って愛情があるということだと思うんですね。実際に色々な社会制度の変革で、そういうものが変わっていかないと具体的なところは変わらないのか。それともやはり最初はこういうことを多くの方に知ってもらって、例えば川上さんのお考えだと大事なことは、実際のあり方というふうに聞こえたんですけど、例えば日本では皆が同じであろうとしたりとか、そういうことはある意味で言ったら「和」です。そういう「和」という考え方と、一人一人が違って、制度として変わっていったほうがいいと思われるかどうですか。

川上

もともと「和」の概念が明治から、特に太平洋戦争あたりでかなり変わっていると思うんですよね。「和」の概念は道教とか儒教から来ていて、道教の場合は、色々な多様性のあるもの、多種多様なものが共存できる環境というのが「和」なんですけど、何かこう日本で言う「和」というのは均一性とか皆同じみたいなところです。みんな協調性とか色々言っているけど、もう一度、本来「和」ってどういうことなんだろうか、一度言葉として、文化として考えてみることは重要だし、それがどこから今みたいな何かみんな一緒じゃないとダメみたいな考え方が生まれたのかというところを考えてみようと提示していくことは、我々僧侶の仕事でもあるんじゃないかなと思います。

法律を変えるというような政治的なレベルのことは、我々の動きではどうしても限界があるので、人の考え方ということを考える機会を持ってもらう。それこそお彼岸の時でもいいし、檀家さんのところへ行ったときでもいいし、そういう話をやってみるという草の根運動のようなことをやっていくのが我々の仕事じゃないかなと。

戸松

ありがとうございます。では西村さんはどうですか。僧侶としてこういう問題への関わり方。それから今「和」っていうと、日本では空気を読むとか均一性だとか同じ方向を向いてということですけど、皆バラバラでその中に「和」があるという考え方もあると思いますが、西村さんはどのように考えられていますか。また、杉山さんが話されたように、病気になったり亡くなったりという、実際には理念ではなくて結局は具体的な生活の話だと思うんですね。そういう点でどのように僧侶として関わっていけるかということをお話しください。

西村

色々なものがあって「和」ではなくて、みんなが一緒になるっていう「和」になってしまった理由というのは、やっぱり戦争のときに女性は家で家族を守って、男性は皆が兵役に行ってという中で、それからはみ出る人がいないようにっていうことだったり、贅沢している人がいるけど、みんな辛いときに何で一人だけみたいな感じになっていたことが、私の考えでは大きいです。やっぱりそうしてこなければ生きてこられなかったというのが理由としてあると思います。でも今はみんながそれぞれの個性を生かして協力し合うということが可能になってきている時代なんじゃないですかということを希望としてとらえることが大切かなと思っています。

先ほど戒名のお話も出ました。皆さんがどう考えているかは見えないということでしたので、例えば仏教界から「戒名はどうしましょうか。もし私たちが気づいていないことがあって希望されていることがあれば、それを記入してくださいね。」というふうに一回送って、その後もパンフレットみたいなものを置いたりして、聞く姿勢がありますよ、学びたいと思っていますよという姿勢を示すことが多くの人に安心感を与えてくれるのではないかなと感じます。

戸松

ありがとうございます。ということはやっぱり私たちが今ここでシンポジウムをやって学んで、思っていてもそれを形にしなければ人には伝わらないということですかね。

西村

そうですね、そう思います。

戸松

ありがとうございます。では、杉山さんいかがでしょうか。

杉山

教育という話も出てきましたが、教育ってまさに大事だと思っています。特に小さい子にこういうことをどう教えるのかという話になりがちなんですけれども、良い事だとか悪い事だとか教える必要はなくて事実なんですよね。事実をちゃんと事実として伝えていくことが大事ですし、決してこういったLGBTの話というのは「らしさ」や「男女の分け」がいけないという話じゃないんですね。ただ、らしさの強要がいけないと言っているだけで、例えば本当に筋肉質で雄々しくて髪も短髪というような、そういう男らしくしたい男性にそれはダメだと言うつもりも全然なくて、ただそうしたくない人にも「らしさ」を強要するということが苦しいんじゃないかなと思うんですよ。

でもそれを突き詰めていくと、先ほどから何度も出てきているようにやっぱり知識。知らないということ

で、どうしても否定的になってしまったりします。そこには、ひとつも悪気がないというのも課題だと思っているんですよ。じゃあ例えば足立区の区議会議員の方が、「足立区が滅びる」なんて言ってしまったのは、僕はお会いしたことがないですけれども、決して悪気があって言っている言葉ではないです。本当に良かれと思って言ってしまったことが多くの人を傷つけている。なぜかというとやっぱり知らない。それに対しては無知だということが、知らない上での偏見にまみれた考え方で発言してしまうのであのようになってしまうんですよね。決していいとは言えないですけれども、やっぱり 10 年前、20 年前なら致し方なかったかなと思う部分はあるんですが、もう今では知らなかったでは済まされないだけの情報がありますので、そういった失言をしてしまうというのは本当に勉強不足でしかないのかなと。ただ決して、これまでがダメでこれからがいいっていう過去の否定の話ではなくて、これまでもよかったし、ここをさらによくするいわゆるアップデートするためにも、もう一段みんなでちゃんと知識をつけて、より多くの人が等しく平等に人生を過ごせるということを考えていくことが大事なのかなと思っています。

戸松

ありがとうございます。よろしければご登壇の皆さん同士で、それぞれに聞いてみたいとか、どうなんだろうということがあればどうぞ。

川上

悪気がないという話がありましたが、私一人娘がいるんです。その娘が何か優しいことをやると、うちの母が「女の子だから優しいんだよね」とか「やっぱり女の子だよね」ということを言うんですよね。母が悪気は無いのは絶対分かるんですけど、「そうじゃなくて彼女が優しいということであって女の子だからっていうのはもう言わないで。そのうち、女の子だから優しくないとダメなの、男の子だと乱暴でもいいのみたいなことを言っちゃうよ。それで男の子は乱暴でいいんだ、でも女の子は何されても優しくないとダメなんだみたいなことになっちゃうから」と言うんです。

やっぱり世代というのもあると思います。知らないから、女の子だからね、男の子だからねとか、そういう形ってあると思うんですけど、そうじゃなくて我々の世代になって、今の場合はそうじゃなくて、「あなただからそうなんですよ」「あなたはあなたなんだよ」っていうところで育てていかないとダメなのかなと杉山さんの話を聞いていて思いました。

杉山

属性で語らないということですね。目の前にいる人、その人にしっかり向き合うということですよね。例えば、お坊さんってこうだよねって言われてもお坊さんにしても色々な人いるでしょうっていうように、土俵は違っても同じようなところがあるのかなと思いますのでそこがやっぱりポイントですね。

戸松

この問題をやっていくと私たちお坊さんも少し自由になれるのかなって。

杉山

こうあるべきの押し付け合いじゃなくて、こうありたいってお互いを応援できる社会がいいと僕は思っているんですよ。日本人とはこうあるべきとか、例えば男性はこうあるべき、お坊さんはこうあるべきみたいなことではなくて、相手をその枠にはめてしまうということは、きっと自分の中にある多様性を自分で否定してしまうことになるし、より苦しくなっていっちゃうと思うんですよ。やっぱり「こうあるべき」よりも「こうありたい」という、お互いをちゃんと尊重できることを何よりも大事にしていきたいなと思っています。

戸松

例えば私たちが生きている間には色々な苦しみがあったり、見解があったり、なかなかみんなが理想通りにできなくて。今は死んだ後の世界を信じているという人は非常に少ないですけど、本当に自分たちが死に直面した時とか、それはなってみないと私も色々と勉強はしてきましたけど正直、本当に自分がなってみないとおそらく分からない。

今のお話を聞いていると、やっぱりそういう中でも希望を持って生きるということが私はまさに仏教の教え、仏教の大事さであると思います。今まさにおっしゃられたこうありたいということが叶う、そう思って生きていける、あるいは亡くなっていけるという事が大事だと思います。西村さんそのあたりどのように感じられていますか。

西村

私は、こうあるべきということに本当にとても苦しめられてきました。男の子だからメイクしちゃいけないんじゃないのとか、お坊さんだからこれやっちゃいけないんじゃないということもあります。会った人に「お坊さんだから癒し系なんですね」みたいなことをよく言われるんですけど、私はそういうつもりはなくて、修行の時に一緒だった 90 人のお坊さんたちも皆が癒し系なわけではなくて、夜に歌って怒られていた人もいたので、別にそういうわけじゃないよと思いました。

私が大切だなと思うことは、いま色々カテゴリーに分けたりしていますけれども、こういう人たちがこうなんじゃなくて、それぞれの人がそれぞれの生い立ちやバックグラウンドや理由や状況があるということを聞いていくことが大切だと思うんですね。皆さんの話を聞いて、こういう気持ちだったんだなってことがわ

かれば、その人を嫌いになることってすごく難しいと思います。だから私は自分の話もしていきたいし、学びを続けていきたいという気持ちがあります。

この前、文野さんが出された本をいただいたんですけれども、この中に自分もセクシャルマイノリティだけれども他のマイノリティの人について知らないことがあるかもしれない。自分も知らずに他の人を傷つけていることもあるかもしれないということが書いてありました。私も違う人についてはもちろん知らないことがあるし、知らないことがあって当然だからプライドを高くしないで学びたいですという気持ちを持ち続けて、それぞれの人が違うんだ、カテゴリーに分けることはできない、それぞれの色がそれぞれ違う、赤とか青とか、政治も男女もそれだけには分けられなくて、それぞれが違う色なんだということを私は多くの人の心に常に発信して、こういう人はこうあるべきというふうに考えてはいけないんだと思っていただけるとすごく生きやすくなるかなと思います。

川上

お二人の話を聞いていると唯識論が頭に浮かびました。我々は名詞を使いたがり、あなたはこういう名前のもとでこうだよね、これはこういうものだよねというふうにカテゴリーさせて入れてしまいます。実は今どういう出来事が起きているか、名詞ではなくて動詞で見なさいよっていうのがすごく簡単に言うと唯識論の考え方なんですけど、この目の前にいる人っていうのはどういう人なんだろう、今どういう状態なんだろうかと謙虚さをもって考える、あと好奇心ってすごく大切なのかなと思いました。

戸松

ありがとうございます。本日こうしてそれぞれのライフストーリー、また経験されたことを中心にお話をいただきました。

全日本仏教会主催という中で、仏教はどうなんだというところはもちろんありますけど、そうではなく一人一人の人間として、お坊さんも人間ですし同じように怒ったり悲しんだりしますし、これはもう皆さんと何も変わらない。属性には全然関係ないと思っています。そういう意味では、これからご住職であったりお寺関係の方も、一人の人間として自分自身に向き合ってこういうことをどう考えるか。檀信門徒には色々な方がいらっしゃって、サンガというのは共同体だと思うんですね。そこでやはりできるだけ多くの方のお話を伺う。これは LGBTQ などの性的マイノリティだけではなくて、社会的なマイノリティであったり、それから障害がある方とか色々いらっしゃると思います。そういう方に門戸を開いてお話を聞く。

よくお坊さんは色々知っていて勉強すると思われています。語弊があるかもしれませんが、勉強はしているんですけど意外と社会的経験はそんなにしていなかったりします。それから一番の私たちの問題は、檀信門徒の方をはじめ色々な方から本当のことを言ってもらえないことです。例えば「このクソ坊主」と思っても、なかなか面と向かってはクソ坊主とは言わないですが、巷にはそういうものがいっぱい溢れています。ある意味では色々な方から「クソ坊主だね」とか言われるぐらいの関係性を紡いでいけることが大事かなと思います。

全日本仏教会といたしましては今日のことをなるべく多くの方に見ていただけるように公開しご報告をして、やはり社会全体でこの問題を考えていく一つの契機にしたいと思います。

数から言えば、全日本仏教会の加盟団体に所属するお寺は全国に約 75,000 あります。地域性があるので、色々な価値観があったり、様々な事情もあると思いますので、全部同じ方向を向いてということはなかなか難しいと思いますけれども、今日のお話を受けて、それぞれのご住職、あるいはそれぞれの地域の中でこういうことをやってみようということがあれば仏教界としては是非進めていただきたいですし、支えていきたいです。

例えばレインボーステッカーなどを寺院の門に貼るとか、ご葬儀や戒名などでご相談があればいつでもお越しくださいとか。そういう中で考えが出てくる可能性も非常にあるので、具体的に進めていきたいと思っております。何よりもウェルカミングアウトということ。やっぱりお寺は何でも安心して行けるという安心感。お金の問題、お布施のことでよく批判をいただいていますけど、お布施の点でもお寺に行ってお金の心配をしなくていいあり方を全日本仏教会としては目指していきたいと思っております。

本日は、本当にお忙しい中お三方にはご登壇いただき、お忙しい時間にご視聴いただいた皆さま本当にありがとうございました。是非、今日皆さまからいただいたお話をいかしていきたいと思っております。また今後ともこういうチャレンジングなシンポジウムもやっていきたいと思っておりますので、ご視聴いただいた皆さまから率直なご意見、あるいは至らなかった点、こういう点は良くないという改善点を中心に、ご指摘いただければありがたいと思っております。本日はありがとうございました。

公益財団法人
全日本仏教会
WFB（世界仏教徒連盟）日本センター

レインボーステッカーのご案内

全日本仏教会とは

全日本仏教会とは、日本の伝統仏教界における唯一の連合組織です。広く社会に向けて、仏教の「和」の精神を広め、世界平和に寄与することを目的として今日に至っております。またＷＦＢ（世界仏教徒連盟）に加盟して海外の仏教徒との交流窓口になるとともに、各国の諸宗教とも協力して世界平和の実現をめざしております。

2015年に国連でＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）が採択され、全日本仏教会では活動の一環として「誰一人取り残さない世界の実現」に向けて、世界が合意した持続可能な開発目標への取り組みを進めております。仏教では、性別、性的指向、性自認、障害の有無、人種など、いかなる理由によっても人を差別をすることなく、全ての人がその人らしく幸せに生きられることを願っております。そのために差別や偏見によって起こる、社会問題の解決に向けて取り組んでおります。

レインボーステッカー

今回作成したレインボーステッカーは、レインボーがそれぞれの色で輝いているように、それぞれの人がそれぞれの個性で輝き、幸せに生きることを仏教が願っていることを発信する目的があります。6色のレインボーは性の多様性を表す象徴として、世界的に用いられています。今回のステッカーでは、性の多様性だけでなく、すべての人の個性やその人らしさを尊重するという意図を込めたデザインです。仏教の『一切の生きとし生けるものは皆幸せであれ』という教えを心に思うだけではなく、寺院の門や玄関にレインボーステッカーを掲示していただくという、思いをかたちにした取り組みです。

- 多様性を象徴するレインボー
- 信仰のシンボルである合掌のマーク
- 肌の色にとらわれない、黒い影の色
- 全ての個性を肯定する姿勢をアピール

デザイナー

このステッカーはLGBTQの当事者の２人のアーティストによってデザインされました。西村宏堂さん（僧侶/メイクアップアーティスト）とセルヒオ・ガルシアさん（バルセロナ在住のクリエイティブデザイナー）です。西村さんは「LGBTQの当事者は、仏教のコミュニティの中にも存在し、仏教は多様な人と共に歩いていく存在である」という思いでデザインされました。

平等な世界をめざして

今回のレインボーステッカーを通して、仏教が持つ平等性を、お寺にお越しになる方だけでなく、世界に発信していきます。我々は全ての人に差別のない対応をし、その声に耳を傾け、共に考え、共に歩む姿勢を示し、また多様性についての正しい理解を深めるために、全日本仏教会では引き続き取り組みを進めていきます。このステッカーは多様性を応援する意思を持つ寺院だけでなく、ステッカーの趣旨に賛同している方々にもお渡ししております。詳しくはウェブサイトをご覧ください。また個人使用目的のために、画像ファイルをダウンロードしていただくことが可能です。

全日本仏教会
http://www.jbf.ne.jp/

公益財団法人
全日本仏教会
WFB（世界仏教徒連盟）日本センター

April 20th, 2021

Japan Buddhist Federation presents:
RAINBOW STICKER

Who we are.

Japan Buddhist Federation (JBF) is the only federation of mainstream Buddhism in Japan, consisting of major Buddhist denominations and all prefectural Buddhist Associations and other Buddhist groups including 59 main denominations. As JBF, we are endeavoring to present various opinions and views on the issues so that the general public may deepen their knowledge and understanding. Today, Japan Buddhist Federation (JBF) would like to introduce the ***Rainbow Sticker***, in order to show respect all people and to promote inclusivity. Buddhism does not tolerate any form of discrimination due to any attributes, such as sex, sexual orientation, gender identity, race, or disabilities..

Rainbow Sticker.

The *Rainbow Sticker* is designed to be distributed for people who support this cause. The stickers will be displayed at the gates and entrances of Buddhist facilities to demonstrate support. One of the core beliefs of Buddhism is that “All creatures should live happily.” As each color of the rainbow shines in its own color, Buddhism wishes that each person should shine in their own color as well.

- Rainbow colors to celebrate diversity.
- Universal motif of “with palms together.”
- Silhouette of the hands. We all cast black shadows regardless of skin colors.
- Demonstration of acceptance.

Designers.

The *Rainbow Sticker* was designed by two LGBTQ artists. **Kodo Nishimura** (Buddhist monk in Tokyo) and **Sergio García** (Senior Creative Designer in Barcelona). Kodo says that LGBTQ individuals exist within Buddhism communities as well. Buddhism is not only giving a hand to solve discrimination, but Buddhism is fighting and walking together with all people to end injustice.

Support Equality.

Japan Buddhist Federation would like to appeal to the world that Buddhism promotes equality regardless of any differences. We will keep raising awareness through informative publications and seminars. For all other organizations and individuals who wish to display the *Rainbow Sticker*, we are happy to distribute them to celebrate the inclusive community. For the international Friends supporters, we have made the sticker downloadable online, so please feel free to print and create your own sticker with some conditions. We prohibit any manipulation of the image and usage outside personal usage. Please contact us for any inquiries regarding this sticker.

Get your *Rainbow Sticker*.

Visit our website to download the sticker.
http://www.jbf.ne.jp/

Thank you,
Japan Buddhist Federation

公益財団法人
全日本仏教会
WFB（世界仏教徒連盟）日本センター

レインボーステッカーの掲示について

寺院関係者の皆様へ

今回作成したレインボーステッカーは、レインボーがそれぞれの色で輝いているように、それぞれの人がそれぞれの個性で輝き、幸せに生きることを仏教が願っていることを発信する目的があります。仏教の『一切の生きとし生けるものは皆幸せであれ』という平等の教えを心に思うだけでなく、思いをかたちにする具体的な取り組みです。

葬儀や戒名、お墓を扱う寺院関係者が多様性について理解を示すことは必要不可欠なことです。例えばLGBTQの当事者が、自分のセクシュアリティーについて家族やお寺にカミングアウトできず、自分で認識している性と違う戒名を付けられたり、同性のパートナーがいることを誰にも打ち明けられず、亡くなっても大切な人の葬儀に参列できなかったり、一緒にお墓に入れないという現状があります。そのようなことにならないように、寺院関係者が日頃から、全ての人がありのままの自分でいられる環境を作っていくことが大切です。

レインボーステッカーを寺院の門や掲示板に掲示して仏教が多種多様なあり方を尊重しており、その声を聞き、わからないことについては共に学び、共に考え、共に歩む姿勢があるということをお寺に来られた方をはじめ、社会に発信し、伝えたいと思います。

ステッカーを掲示することで、お寺にご相談に来られる方があるかもしれませんが、その場合は相談者の秘密を守っていただくようにお願いいたします。例えばLGBTQ当事者であることを打ち明けられた際に、そのことを他の人に話してしまうアウティングなどは謹んでいただけるようお願いいたします。また理解のない言葉で傷つけてしまうことのないよう、LGBTQについての正しい知識と学び続けるお気持ちをお持ちの方に対応していただきたく存じます。多様性についての正しい理解を深めるために、全日本仏教会では引き続き取り組みを進めていきます。ご理解とお気持ちのあるご寺院のご協力をお願いいたします。

全日本仏教会
http://www.jbf.ne.jp/

レインボーステッカー　RAINBOW STICKER

レインボーステッカーの個人利用は許可します。この画像の加工はお断りいたします。
This Rainbow Sticker can be used for private use, however please do not modify the image.

公益財団法人
全日本仏教会
WFB（世界仏教徒連盟）日本センター

このレインボーステッカーは全日本仏教会で頒布しております。詳細は全日本仏教会公式ホームページ（http://www.jbf.ne.jp/）にてご覧ください。
また、YouTube にてこのシンポジウムの模様を見ることができます。
公益財団法人　全日本仏教会　のチャンネルからご視聴いただくか下記のＵＲＬ・ＱＲコードからご視聴ください。

仏教と SDGs II
～ LGBTQ の視点から考える～　第 1 部
https://youtu.be/Al5RqlPKG7M

仏教と SDGs II
～ LGBTQ の視点から考える～　第 2 部
https://youtu.be/FRlyCa7rHdU

全日本仏教会　公開シンポジウム

仏教とSDGs ❷

現代社会における仏教の平等性とは ～ＬＧＢＴＱの視点から考える～

2020年11月5日(木)開催

発行日　2022年（令和4）年3月1日
発行所　公益財団法人　全日本仏教会
〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4
TEL：03-3437-9275
FAX：03-3437-3260

公益財団法人

全日本仏教会

WFB（世界仏教徒連盟）日本センター